

## テサロニケ人への手紙第二1章「苦しみに対する報い」

### **1A 苦難の中の信仰 1-4**

1B 主の御名による挨拶 1-2

2B 忍耐に働く信仰の成長 3-4

1C 神への感謝 3

2C 使徒たちの誇り 4

### **2A 神の報復 5-10**

1B 苦しみの逆転 5-7

1C 神の国にふさわしい者たち 5

2C 苦しめる者たちへの苦しみ 6

3C 苦しめられている者たちへの安息 7

2B 主イエスの現れ 7-9

1C 燃える炎の中の主 7

2C 神を知らない者たちへの罰 8

3C 永遠の滅び 9

3B 聖徒たちの感嘆 10

### **3A 使徒たちの祈り 11-12**

1B 召しにふさわしい良い行い 11

2B 恵みによる栄光 12

## 本文

テサロニケ人への手紙第二に入ります。第二の手紙は、第一の手紙の続きになります。第一の手紙を出してから、しばらくしてから第二の手紙を出したと思われます。第一の手紙で、パウロが主の日について教えていたのを思い出してください。神がご自分の御怒りを、この地上の罪と不法に対して下す、神の定められた時です。しかし、あなたがたは光の子、昼の子なので、それが盗人のようには来ませんと、パウロが励ましていましたね。主イエス・キリストによる救い、すなわち、主が天から降りて来られて、信じている者たちを引き上げて天に連れて来られるので、地上に下る御怒りから私たちは免れるということを学びました。

第二の手紙は、第一の手紙を出してから、それほど経っていないと思います。テサロニケの人たちは、福音を信じる時からすでに、迫害を受けて、困難な中にありました。その状況は改善することなく、むしろ悪化していたように思われます。テサロニケは、ローマ皇帝に忠誠を誓っていたので、皇帝礼拝が盛んでした。それを避けようと思えば、市場で売り買いをするのも制限されるので、彼らは貧しくなっていました。また、カエサル以外の者を王としているということで、反逆しているとい

う中傷も受けていたことでしょう。殉教者もさっそく出てきているという記録もあります。家も取り上げられた人もいるかもしれません。その迫害は困難を極めていました。

そのような中で、パウロたちが出した手紙と言われているものが、彼らのところに届いたようです。それが、主の日はすでに来ているという内容のものでした。しかし、パウロたちが出した手紙ではない、偽物です。また、御霊が語らせたとして預言としても、主の日は既に来たかのように語られました。それで、彼らに動揺が走ったのです。主の日というのは、御怒りの現れであることを彼らはよく知っていました。つまり、今の苦しみは主の御怒りの現れということになり、彼らは救われているはずなのに、神の怒りを受けているということになってしまいます。ですから、動揺しました。

これは、キリスト者にとって大きな問題です。苦しみを受けている時に、それがあたかも、神が自分たちを見捨てたのであるとか、神がお怒りになっているからだということが、まことしやかに語られるようになります。私たちが生きているのは、神の恵みによって、そして信仰によってですから、もし、自分の内に過失や欠点がないと言ったら、それはあります。そこで、悪いことが起こると、そういった弱さにサタンは猛烈に攻撃します。そして、私たちが、恵みによって救われたということを疑わせるのです。

私たちが今、生きている世界では、いろいろなことが起こっているのです、キリスト教の境界で時々、聞こえてくるのは、今はすでに患難時代なのだ、ということです。大患難、すなわち主の日はすでに来たかのように語る人々がありますね。この頃は、特にそうです。終わりの日の最終段階の出来事が、たった今、起こっているかのように語ります。例えば、ワクチン接種証明書が、獣の刻印であると語る人々がありました。月が赤く見える時がありましたが、それがヨエルの預言の月が赤くなるということと同じだという人たちもいました。教会が大患難の中にいるという人たちは、預言の中にある、大患難の恐ろしさを本当にその通り受け止めているのか？と思います。そして何よりも、大患難は、神の御怒りの現れであり、それを教会が被っているとするのは、「私たちは救われていない」と言っているのに等しいのです。苦しみの中にいる人々に対して、神がどのように見ておられるのかを真逆に語る、悪質な教えであります。

迫害によって苦しみを受けていることについて、パウロはそれを正しく、神の意図しているとおりに見ていくように正しています。そして、彼らに救いの確信を抱くように勧めています。これが、福音に仕える者たちがすることです。その他、終わりの日が近いということに便乗して、仕事をしないで迷惑をかけている者たちがいるので、厳しく戒めるようにという言葉も、この手紙に残っています。

#### **1A 苦難の中の信仰 1-4**

#### **1B 主の御名による挨拶 1-2**

<sup>1</sup> パウロ、シルワノ、テモテから、私たちの父なる神と主イエス・キリストにあるテサロニケ人の教会

へ。<sup>2</sup> 私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。

「シルワノ」とは、シラスのことです。当時の人たちには、自分の民族の名前の他に、ローマの名前を持っている人々がいました。シラスもその一人です。ローマの名前を持っているということは、ローマ市民権も持っていました。パウロと同じように、シラスも、ローマ帝国での福音宣教で、数々の困難を経ている時に、その市民権によって守られることがあったでしょう。ピリピで、パウロもシラスも鞭打たれましたが、パウロだけでなくシラスもローマ市民であり、それでその不当な仕打ちを抗議することができました。テサロニケの人たちにとって、パウロ、シラス、テモテは、自分たちに福音を伝えた器であり、三人ともよく知っていました。

そして、彼らの教会のことを「私たちの父なる神と主イエス・キリストにある」と、シンプルに言っています。しかし、この方のうちにあるからこそ、数々の試練の中でも彼らは守られたのです。私たちが主のうちにある、という確信はあるでしょうか？そして、いつものパウロの挨拶のことは、「恵みと平安」です。主の恵みによって、神の平安の中に留まることができます。

## 2B 忍耐に働く信仰の成長 3-4

### 1C 神への感謝 3

<sup>3</sup> 兄弟たち。あなたがたについて、私たちはいつも神に感謝しなければなりません。それは当然のことです。あなたがたの信仰が大いに成長し、あなたがたすべての間で、一人ひとりの互いに対する愛が増し加わっているからです。

パウロは、ここで「感謝しなければなりません」と言っています。単に、感謝しています、ではなく、感謝しなければならない、と言っています。なぜなら、彼らの内に働かされているのは、まぎれもなく神ご自身であり、こんな迫害や困難の中にいるのに、信仰が大いに成長しているのです。それから、一人一人に対する互いの愛が増し加わっているのです。

信仰が大いに成長するというのは、どういうことでしょうか？アブラハムのことを思い出してください。彼は神を信じていました。けれども、初めはハガルを通してイシュマエルを得るなど、神への信頼がそれほどありませんでした。けれども、神のすばらしさ、その約束の真実を、信仰の歩みの経験を経て行くことによって、彼の愛する独り子イサクを献げなさいと命じられた時に、彼がよみがえるとまで信じて、聞き従いました。このようにして、神への信頼が成長するのですが、パウロは、テサロニケ人たちに、そのような飛躍的な神への信頼を見ているのです。ちょうどこれは、ダニエルの友人たちのようです。燃える火の炉の中に入れられるという時に、神が救い出してくださるし、たとえそうでなくとも、金の像の前にひれ伏さないと大胆に宣言したような、飛躍的な信頼です。

苦しみに反比例するように信仰と愛が増し加わるというのは、キリストの中に見いだされるもの

です。今、パウロは、彼らの教会が父なる神と、主イエス・キリストの中にあると言いました。神とキリストには、死といのちの法則が働いています。よみがえりがあります。キリストの死があれば、そこにはキリストのいのちが生まれ出ます。したがって、キリストのうちにある者たちには、苦しみが苦しみに終わりません。そこから、良きものが次々と生まれるのです。死んでも、よみがえる力が働くのです。使徒の働きの教会に、それを見ることができますし、それ以後の初代教会の証しは、ローマで迫害が強ければそれだけ信仰が清められて、なおのこと信仰が増し加わって、ついにローマ全体にキリスト者が満ちることになりました。それが教会史の中にずっと証しされています。

そして今現在、迫害下にある教会の兄弟たちの信仰は、飛躍的に成長するのです。テサロニケの人たちのように、信じて間もないのに、過酷な状況にいと、とてつもない神への信頼が生まれて、信仰の働きが瞬間に広がっていくのです。イランの教会ばかり、中国の教会ばかりです。そして、私たちの生活もそうではないでしょうか？信仰が試された時に、その真価現れて、神への信頼が一気に増し加わるのです。

そして、「一人ひとりの互いに対する愛が増し加わっている」とも、パウロが言っています。ここで、単に、互いに対する愛というだけでなく、一人ひとりの互いに対する愛です。愛は、大雑把に大勢の人に向けられるものではなく、一人一人に寄り添います。苦しみの中で、それぞれがさらに親しく知り合ったのでしょうか。そして、互いに善を行っているのでしょうか。私たちが、誰かが苦しめば、その人のためにみなぎ重荷を持って祈ります。そして助けようとします。

ここに、私たちは二つの道があります。苦しみを受けている時に、神への信頼を減らして、世を愛することです。そうすると、困難のゆえに、どんどん愛が冷えて行きます。しかし、神をそれでも信じて行く時に、信仰がどんどん増し加わります。そして、互いに善を行っていくようになります。愛が冷えるのではなく、増し加わるのです。一つの試練に、私たちがどちらで反応するか、また応答するか？で、大きく二つに分かれるのです。

#### 2C 使徒たちの誇り 4

<sup>4</sup> ですから私たち自身、神の諸教会の間であなたがたを誇りに思っています。あなたがたはあらゆる迫害と苦難に耐えながら、忍耐と信仰を保っています。

ここでパウロたちが言っている「誇り」とは、神をあがめることです。これは、すごいことだ！と、主をほめたたえていることです。神の諸教会で、テサロニケの教会で、とてつもないことが起こっていると、みなぎ誇っているのですが、その教会を開拓した者たち本人も、自分たちがやったのではなく、全く予期しない形で彼らの信仰を見て、驚いています。

ここでパウロが言っている「忍耐」は、信仰と共に働いているものです。我慢というようなものでは

ありません。迫害と苦難の中で、なおのこと神がそこにおられると、信仰を十分に働かせるのです。日本語には、忍耐の他に、持続的にその場にとどまるという意味合いの言葉で、「堅忍」があります。「堅く立って、耐え忍ぶ」という意味合いのことです。ギリシア語は、この堅忍の言葉に近い言葉が使われています。

これはとても生々しいことです。トルコで長いこと教会を牧会していたアメリカ人の人が、でっかあげられたスパイ罪で牢に入っていました。その困難の中、信仰が試され、神は存在するのか？という疑いまでが、思いをよぎったそうです。それでも、私は神を待ち望むとする時に、忍耐が養われます。ヤコブが、手紙の中で教えました。「1:3-4 あなたがたが知っているとおりに、信仰が試されると忍耐が生まれます。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは何一つ欠けたところのない、成熟した、完全な者となります。」

## 2A 神の報復 5-10

### 1B 苦しみの逆転 5-7

#### 1C 神の国にふさわしい者たち 5

<sup>5</sup> それは、あなたがたを神の国にふさわしいものと認める、神の正しいさばきがあることの証拠です。あなたがたが苦しみを受けているのは、この神の国のためです。

ここでパウロは、彼らが苦しんでいるのは、神に見捨てられたとか、神から苦しみを受けているとかでは全くないと、はっきり否定しています。その逆です。神の国にふさわしいものと認められているのだ、ということです。このことを、苦しみを受けている人々は何度も何度も聞く必要があります。そのようには感じないからです。イエス様は、山上の垂訓でそのことを明確に言いました。迫害を受けている者は大いに喜びなさい。天に報いがあるからだ、と。そして、ペテロは第一の手紙で語りました。罪のために苦しみを受けるのなら、何ら誇るべきものはないけれども、「神の御前における良心のゆえに悲しみに耐えるなら、それは神に喜ばれることです。」と言いました(2:19)。

そして、「神の正しいさばきがあることの証拠」だと言っています。これは、迫害者がキリスト者を苦しめれば苦しめるほど、彼らの上に神の裁きが留まることになるということです。悪に対して善で報いなさいとパウロが、ローマ 12 章で勧めた時に、箴言の言葉を引用していました。「箴 25:21-22 あなたを憎む者が飢えているなら、パンを食べさせ、渴いているなら、水を飲ませよ。なぜなら、あなたは彼の頭上に燃える炭火を積むことになり、【主】があなたに報いてくださるからだ。」炭火を積むことになると言っています。これは、神の正しい裁きが悪をはかる者たちに下るのだ、ということです。午前礼拝でお話ししましたが、キリストに対する信仰をもって生きるところに、世においては不条理が次々と起こります。けれども、その度に、主が必ず覚えていてくださって、その悪に対する裁きを用意しておられるのです。

## 2C 苦しめる者たちへの苦しみ 6

<sup>6</sup> 神にとって正しいことは、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、<sup>7a</sup> 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えることです。

神の正しい裁きについて、パウロがここで説明しています。今苦しんでいる者は安息を受け、そして、苦しめている者たちが苦しめられます。立場が逆転します。主が私たちに、山上の説教などで語られたものは、まさにこの逆転でした。貧しい者は幸いであるが、富んだ人は哀れである。今、泣いている者は幸いだが、笑っている者は哀れだ。(ルカ 6:20-26 参照) その前に、旧約ではサムエルの母ハンナの賛歌にも、現れていました。( I サム 2:6-8a 参照)

これは、すべての目が主を見ることができるようになるためです。神の前に、どの人も出て、ひれ伏すことができるようにするためです。預言者イザヤは、それを凸凹道に喩えて、道がまっすぐにされ、平らにされると言明しました。「40:4-5 すべての谷は引き上げられ、すべての山や丘は低くなる。曲がったところはまっすぐになり、険しい地は平らになる。このようにして【主】の栄光が現されると、すべての肉なる者がともにこれを見る。まことに【主】の御口が語られる。」低くされている者たちが、信仰によって高められて、神をほめたたえます。高くされている者が、信仰の中でへりくだり、これまた神をほめたたえます。みな、キリストにあって一つになり、主をほめたたえる、というのが神のみこころです。

午前礼拝でじっくりと学びました。6 節によれば、苦しめる者は、その苦しみにふさわしい苦しみをもって神は報われます。それは、仏教の因果応報のようなものではなく、神の公正を語っています。悪を行っている者が善で報われることはなく、善を行っている者が悪で報われることはないということです。(ローマ 2:6-11) 律法の中で、有名な、目には目、歯には歯、命には命というものがありますが、神がえこひいきすることがない方であることを示しているのです。主は、必ず自分の量るその量りによって、裁かれるようにされるのです。

## 3C 苦しめられている者たちへの安息 7

そして 7 節ですが、苦しみに対する神の報いは、安息です。私たちに、必ず、無念を晴らしたいという思いがあります。それは恨みではなく、善を行っているのに悪が返って来ることに対して、その歪みがまっすぐにされてほしいと願います。その訴えの祈りは、詩篇の中に数限りなく書いてあります。そして黙示録を見れば、天の聖徒たちが、その多くが殉教している者たちですが、神が復讐して下さることを訴えているのです。キリスト者たちが、みことばを歪曲してしまって、敵を愛しなさいということ、敵のしている悪を容認しなさいと受け取ってしまいます。大事なものは、復讐を自分の手でしないということなのです。復讐は神の領域です。ダビデは、自分の命を狙うサウルのことで、決して自分の手で裁きませんでした。けれども、祈りの中では積極的に主が裁かれるように、と祈っています。そして、主が裁かれる、報いて下さることを知る時に、私たちは究極の慰

めを得るのです。安息を得ます。

そして安息を得ると、私たちの心に余裕ができます。その苦しめている者たちが、神の報復を受けることを知っているのです。かえって憐れむことができるのです。かつて、ナチスドイツがユダヤ人を迫害していました。コーリー・テン・ブームというオランダ人のキリスト者がいましたが、彼女の父は、ナチスの親衛隊を見て、憐れみました。なんとかわいそうなことに、と。娘はびっくりしましたが、父は言いました。「彼らは、主のひとみに触れてしまっている。」その意味するところは、聖書になじんでいる人はもうおわかりですね。イスラエルの民に手を出したファラオを始め、神からの呪いを受けました。主は、イスラエルの子らをご自分のひとみと形容されたのです。それで、彼らも神の呪いを受けることを思って、憐れんだのです。このようにして、敵のために祈るのです。

## 2B 主イエスの現れ 7-9

### 1C 燃える炎の中の主 7

<sup>7b</sup> このことは、主イエスが、燃える炎の中に、力ある御使いたちとともに天から現れるときに起こります。

私たちは、第一テサロニケ 4 章で、主が天から降りて来られて、眠っている者たちがまずよみがえり、それから生き残っている私たちが一緒に引き上げられて、空中でお会いすることを見ました。けれどもここでは、主が、「燃える炎の中に、力ある御使いたちとともに天から現れる」とあります。正しい裁きを行われ、ご自身に敵対し、反抗する者たちに戦われるために戻って来られます。これが、地上への再臨です。主が再び来られる時は、二段階を経ます。主を信じている者たちが、天に引き上げられる、携拳と呼ばれているものと、天に引き上げられた者たちと共に、栄光と力を携えて、すべての人が見える形で地上に戻って来られる、再臨という出来事です。ここは、地上への再臨の出来事です。

「燃える炎」とありますが、それは主が聖なる方であることを示しています。モーセが、ホレブの山で、燃え尽きない柴を見て、そこに主がおられるのを知って、ひれ伏しました。主は、聖なるところだから、履き物を脱ぎなさいと命じられました。そしてイスラエルの民がその山の麓にいる時に、主は「火の中であって、山の上に降りて来られた」とあります(出エ 19:18)。火は主の聖なる姿を示しています。そして、反逆者に対しては燃え尽くす、裁きの火でもあります。異なる火を携えて至聖所の入ってしまった、アロンの息子ナダブとアビフは、主の前からの火によって彼らを焼き尽くしてしまいました。(レビ 10:1-2)ヘブル書には、はっきりと「私たちの神は焼き尽くす火なのです。」とあります(12:29)。

そして、「力ある御使いたち」とありますが、主がその聖なる姿、燃える炎の中で現れる時に、そこには力ある御使いが伴っていることが多いです。シナイ山に降りて来て、律法を与えられた時も、

実は御使いの仲介によって主は授けていました。(使徒 7:53) 黙示録には、力強い御使いが次々と現れます。御使いは、神々、エロヒームとも呼ばれることがあります。主は全能者で、主権者であります。そうした、ご自身に仕える霊的な存在と共に動かれることが多いです。帝国の王や皇帝が、単独で動くことがないのと同じですね。側近や使者が数多くいて、それでご自分の権威を示されるのと同じです。

### 2C 神を知らない者たちへの罰 8

<sup>8</sup> 主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に罰を与えられます。

ここの「神を知らない人々」とは、神を知ろうとしない人々と言ったほうが、誤解をしないで分かりやすいです。ロマ 1 章で、パウロはこう書いています。「1:21 彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。」ファラオがモーセに対して、「私は、主を知らない。」と言いましたが、「知るつもりもないよ」と言っているのに等しいです。ですから、「主イエスの福音に従わない」とパウロが言っています。信じるというところには、単なる知的認識ではなく、この方を主として自分を明け渡すという、従うという部分が含まれるのです。

けれども、なぜ福音を信じて受け入れないというだけで、罰を神が与えられるのか？と思われるかもしれません。大事なことは、午前中もじっくり話しましたが、神は、憐れみ深い正しい神だということです。公正に裁かなければ、神の憐れみが憐れみにならなくなってしまいます。人には、罪があります。どんなに道徳的な人であっても、自分を中心に考える罪が宿っています。その罪のゆえに、地上が今のように汚れているのです。正しいことが分かっているのに、良いことをしないという罪もあります。主の慈しみ深さが遍く人々に行き渡るためには、罪を取り除かないといけなのです。そして、罪の取り除きは、キリストの流された血によってのみであります。

けれども、自分には罪がない、救いを必要としないと意固地になれば、罪は留まったままなのです。主は、すべての人が滅びることなく、悔い改めて、救われることを願っておられます。しかし、自由意志を侵すことはできません。その人が拒めば、滅んでしまうのです。それはあたかも、早期発見の癌があって、その癌細胞の除去手術を最後まで拒む患者のようです。そういった形で、主は福音を拒む者たちに罰を与えられます。

### 3C 永遠の滅び 9

<sup>9</sup> そのような者たちは、永遠の滅びという刑罰を受け、主の御前から、そして、その御力の栄光から退けられることとなります。

「滅び」という言葉ですが、消失することではありません。存在しなくなるということではないです。



ここにあるように、主の前から、その御力の栄光から退けられるということです。黙示録を見ると、新天新地に、聖なるエルサレムが天から降りてきます。そこで、第二の死というのが明確に書かれています。「黙 21:8 しかし、臆病な者、不信仰な者、忌まわしい者、人を殺す者、淫らなことを行う者、魔術を行う者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者たちが受ける分は、火と硫黄の燃える池の中にある。これが第二の死である。」天のエルサレムが存在していると同時に、火と硫黄の燃える池が存在しているのです。

そして、それが「永遠」であるというのも大事です。この滅びは一時的で、すべての人が最後には救われるという普遍救済論というものが存在します。けれども、それは聖書が描いている終わりではありません。永遠のいのちか、永遠の滅びのどちらかしか書いていません。神の救いが永遠であるならば、神の滅びも永遠です。もし、その滅びを一時的なものにするならば、私たちの永遠の救い、外敵から守られるという保障がなくなってしまいます。犯人が収容されている刑務所で、脱獄が途中で起こるかもしれないとしたら、その地域社会はどうでしょうか？安全の保障が危ぶまれるのです。永遠のいのちが保障されているのは、永遠の滅びも対にないと成り立たないのです。

### 3B 聖徒たちの感嘆 10

<sup>10</sup> その日に主イエスは来て、ご自分の聖徒たちの間であがめられ、信じたすべての者たちの間で感嘆の的となられます。そうです、あなたがたに対する私たちの証しを、あなたがたは信じたのです。

主が来られるということは、世に属する者たちには悲しみと嘆きでしかないですが、同じ主の再臨は、聖徒たちには賛美と感嘆になります。黙示録は、地上における御怒りの現れがあると同時に、聖徒たちが天でほめたたえている場面が何度となく出てきます。午前礼拝でも引用しましたが、大バビロン、大きな都が滅んだことで、天に歓喜があがります。「黙 19:1-3 その後、私は、大群衆の大きな声のようなものが、天でこう言うのを聞いた。「ハレルヤ。救いと栄光と力は私たちの神のもの。神のさばきは真実で正しいからである。神は、淫行で地を腐敗させた大淫婦をさばき、ご自分のしもべたちの血の報復を彼女にされた。」もう一度、彼らは言った。「ハレルヤ。彼女が焼かれる煙は、世々限りなく立ち上る。」

そして、パウロは、「あなたたちは、私たちの証しを、信じたのですよ。だから、この信者たちの中に、あなたがたもいることになりますよ。」と話しています。迫害と困難の中にいる彼らは、パウロたちの証しを信じているので、この恵みにあずかるのだと教えています。

### 3A 使徒たちの祈り 11-12

このような福音の真理があるので、パウロは、シラスとテモテと共に、次の祈りを献げます。

## 1B 召しにふさわしい良い行い 11

<sup>11</sup> こうしたことのため、私たちはいつも、あなたがたのために祈っています。どうか私たちの神が、あなたがたを召しにふさわしい者にし、また御力によって、善を求めるあらゆる願いと、信仰から出た働きを実現してくださいますように。

主が正しい裁きを行われることを、はっきり知っているキリスト者は、自分の召されていることにふさわしく生きて行くことをよくわきまえるようになります。復讐については、主がしてくださることを知れば、私たちが事の正否を知ることには囚われるのではなく、むしろ、今、自分が召されていることに集中することができるのです。それは、善を行うということと、信仰の働きをするということです。

しばしば、自分の手で裁かなければいけないと思ひ込む人たちが、キリスト者たちにいます。悪や不正があるのは、しかたがないことです。主は、そのことは私たちが知っている以上に、はるかに不正や罪について知っておられます。しかし、主は、「これらのことは、わたしのすることだ。あなたがたは、わたしが命じることを行いなさい。」と基本、言われているのです。サマリア人たちが、イエス様を受け入れなかったことを見た、ヤコブとヨハネが、「主よ。私たちが天から火を下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか。」と言いました。イエス様は戒められました。(ルカ 9:51-56)

私たちは、主が来臨される時に行われる、正しい裁きに任せて、召されていること、つまり、善を求めるあらゆる願いがかなえられ、信仰から出た働きが実現することを求めるのです。テトスへの手紙に、このことをパウロが詳しく話しています。「テトス 2:12-14 その恵みは、私たちが不敬虔とこの世の欲を捨て、今の世にあつて、慎み深く、正しく、敬虔に生活し、祝福に満ちた望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるイエス・キリストの、栄光ある現れを待ち望むように教えています。キリストは、私たちをすべての不法から贖い出し、良いわざに熱心な選びの民をご自分のものとしてきよめるため、私たちのためにご自分を献げられたのです。」主が再臨されるということと、私たちが良いわざに熱心になるということは、直結しています。

そして、「御力によって」とパウロが書き加えているのは、大事ですね。私たちには、良いわざは出てきません。あくまでも信じることだけです。イエス様は、群衆から、神のわざを行うために何をしなければいけないのかと尋ねられた時、「ヨハ 5:29 神が遣わした者をあなたがたが信じること、それが神のわざです。」と言われました。そして信じる者に、御霊の力が与えられるのです。主が用意されている、良いわざを信仰によって行っていくことができます。すでに主は、良いわざを用意しておられるのです。みなさんが、その導きと促しに応えるかどうかが大事です。

## 2B 恵みによる栄光 12

<sup>12</sup> それは、私たちの神であり主であるイエス・キリストの恵みによって、私たちの主イエスの名があなただたの間であがめられ、あなたがたも主にあつて栄光を受けるためです。

私たちが、良いわざを行うこと、また信仰の働きを実現していくにあたって、決して忘れてはいけないのは、「恵みによって」ということです。自分たちの義のわざではなく、もっぱら主の恵みによって救われました。だからこそ、自分には何も良いことがないことを知っており、ただ神の御力によってのみ生きることができるのを知っています。そして、良いわざを行い、信仰の働きがある時に、自分自身ではなく、主イエスの名があがめられます。自分たちではなく、主の御名があがめられます。恵みによって初めて、神に栄光が帰されます。

そして最後に、「あなたがたも主にあって栄光を受ける」とありますが、主が戻って来られたら私たちは、栄光の姿に変えられます。そして主が地上に現れる時に、私たちも栄光の姿でこの方と共に戻ってくるのです。

世にはあまりにも悪がありますね。見ると失望します、がっかりします。しかし忍耐と信仰をしっかりと働かせましょう。召しにふさわしい者になることを、私たち自身も祈りましょう。